

## 「ジャックと巨人たちの物語」をめぐって

依岡道子

### A study on “The History of Jack and the Giants”

Michiko YORIOKA

#### はじめに

イギリスの妖精物語は古い伝統を持つように見えるが、実際は18世紀までイギリス文学には入ってこなかった。現在イギリスの妖精物語として読まれている物語の多くは、フランスの昔話の翻訳であった。シャルル・ペロー (Charles Perrault) の『教訓をともなつた過ぎし昔の物語集』 *Histoires ou contes du temps passe, avec des Moralités*<sup>1)</sup> (1697) が1729年にロバート・サンバー (Robert Samber) により翻訳され、ペローの物語の八篇から七篇までがマザーグースとして人々に愛読されてきた。それは “Sleeping Beauty”, “Little Red Riding Hood”, “Blue Beard”, “Pass in Boats”, “Diamonds and Toads”, “Cinderella”, “Hop o My Thumb” であった。現在、これらの物語はオーピー夫妻 (Peter and Iona Opie) の『妖精物語』 (*The Classic Fairy Tales*) の中に入れられ、広い読者層を得ている。

しかし、18世紀末には妖精物語は未だそれ程高い評価を得ていなかった。子どもの教育に対する関心が高まるにともない、次第に子どもの本の出版が増加し、そのマーケットが広がる時代になっても、子どもの本の出版において、妖精物語が加えられることはなかったようである。子どもの為の読み物として定着しているイギリスの妖精物語 “The History of Tom Thumb” や “The History of Jack and the Giants” は、かつてはどちらかと言えば成人対象の読み物であり、ペローの昔話が翻訳出版される以前から何かの形で人々に知られていたであろう。既に、「親指トムの物語」の起源とその変遷については、発表をしているので今回は、「ジャックと巨人たちの物語」をとりあげ、この物語の成立過程を調べ、イギリスにおける巨人の物語の特徴と由来について考えたい。

#### I

「ジャックと巨人たちの物語」の一番古い版は、妖精物語の研究者たちによれば1711年のものとされている。この版はPart the First とPart the Secondに分けられていて、*Chapbooks of the Eighteenth Century*<sup>2)</sup> に掲載されているその表紙を見ると、Part the Firstは、Nottinghamで印刷されたのであるが、出版年がなく、Part the Secondは、1711年にNewcastleで出版されていたことがわかる。(次頁の図1図2参照) 表紙にはPart the Secondについて簡単な説明文が付いていて、ジャックが北方の巨人を征服した勝利の話し、ガリガンタスが所有していた魔法の城を破壊し、火を吐くグリフィンを追い払い、魔法使いを追い出し、公爵の令嬢を救い、その令

嬢と結婚したと書かれている。

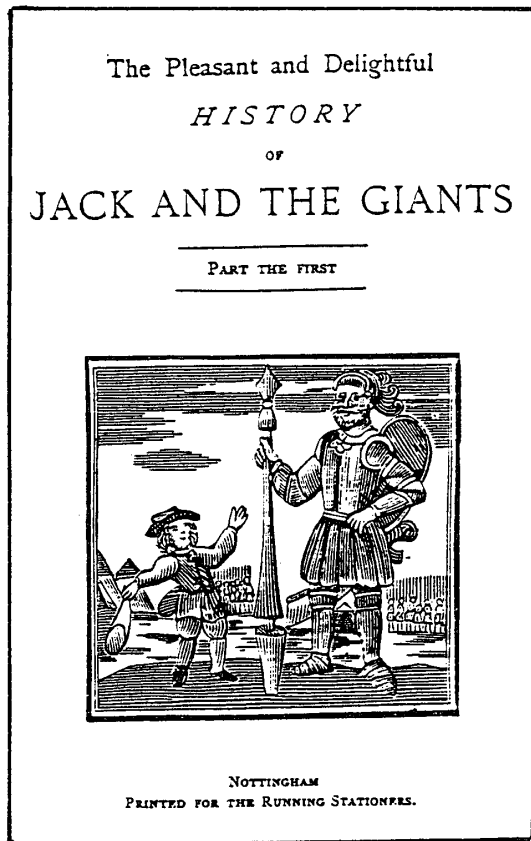


図1 Part the Firstの表紙

図2 Part the Secondの表紙



ところがこの1711年の原本も今は大英図書館から姿を消してしまったということである。<sup>3)</sup>「親指トムの物語」が1621年に、チャップブックとして出版されていたのに対し、「ジャックと巨人たちの物語」の本や、それに関する記述が16,17世紀の文学には見当たらないと言われている。しかし、庶民の間には巨人譚 (giant-lore) あるいは巨人伝説が存在していたであろうから、それらを集めて、「親指トムの物語」の作者リチャード・ジョンソン (Richard Johnson) のような余り有名ではない大衆小説の作家が、「ジャックと巨人たちの物語」を書いたのではないだろうか。

この物語の特徴、その起源を考える前に、「ジャックと巨人たちの物語」の概要を見てみたい。この物語の背景は、アーサー王の時代であり、場所はイギリスのコーンウォール地方のランド・エンド (the Land's End of England, namely, the County of Cornwall) である。父親は、親指トムの場合と同じく、裕福な農夫であり、その息子のジャックは抜け目ない機知のある子どもである。その地方にはコーミランという巨人がいて、農家の牛馬を奪って食べてしまい、人々の恐怖のまとなっていた。知恵者として知られていたジャックは、巨人の凶暴さと残忍さを聞き、巨人退治を引き受ける。その結果大勝利を得て、巨人の宝物まで手中に納める。

第二の巨人はブランダーボアという魔法の城に住む巨人であり、ジャックは一度は捕まるが、

勇気と機転により、二人の兄弟の巨人を殺し、城に捕われている三人の貴婦人を救助する。続いてウェールズに旅して、そこで二つ頭を持ち、表面上は親切であるが、陰で悪事を働くウェールズの巨人らしい巨人に出会う。この巨人に対しては、一般によく知られているプディングのエピソードがある。ジャックは上着の下に隠してあった袋の中に、プディングを流し込み、その袋を自分の腹だと思わせ、それを切り裂いてプディングを流し出すというトリックを演じる。巨人は騙され、自分の腹を切り裂いてしまう。

次に、ジャックはアーサー王の王子に出会い、二人で旅をする。その時三つの頭を持つ巨人に会い、再度知恵を働かせてこの巨人を騙し、巨人から四種類の魔法の品物を手に入れる。これらの品物は後にジャックの巨人退治という英雄的行為を助けることになる知恵の帽子、着用すれば姿が隠れる上着、何でも真二つに切ることができる剣、足に付ければ韋駄天の如く走ることのできる靴であった。これらは親指トムがFairy Queenから得た四種類の魔法の品物に匹敵するものである。

Part the Secondでは、ジャックは巨人殺しの専門家 (Jack the Giant-killer) としてアーサー王や宮廷の人々に認められ、ウェールズに旅に出る。前述の四種類の魔法の品物を利用し、巨人退治に成功する。先ず、巨人から立派な騎士とその奥方を救い、巨人の首をアーサー王へ送る。続いて大きな頭を二つ持つ巨人サンダーデルを退治するが、高貴な騎士、紳士、淑女を見物人として無敵の剣で首を二つ切ってしまう。最後に、魔法の城に住む恐ろしい巨人ガリガンタスを退治する。魔法を破って捕われの公爵令嬢を救出し、アーサー王の宮廷に帰還する。ジャックは巨人との戦いの模様を全て報告し、彼の武勇が認められ、公爵令嬢と結婚する。アーサー王から広大な領地と館を得て、物語は終るのである。

このように、Part the Firstでは、ジャックはその生来の即妙の機才によって巨人を退治するのであるが、Part the Secondにおいては、妖精物語の英雄に多くの場合与えられる魔力を持つ品物の力を借りて、巨人殺しの専門家として巨人退治に大活躍するのである。

先に見たように、この物語の一番古い版は、1711年のものであるが、シェイクスピアの*King Lear* (1605) の中で、狂人をよそおったEdgarの科白に次のような古謡の一節が出てくる。

Child Rowland to the dark tower came ;  
His words were still “Fee, fow and fum !  
I smell the blood of a British man.” (Act III, Scene IV)

この場面はローランドが「フィフォファム、イギリス人の血のにおいがするぞ」と合言葉を言うところであった。「ジャックと巨人たちの物語」の中では、

Fee, fau, fum,  
I smell the blood of an English man,  
Be he alive, or be he dead,  
I'll grind his bones to make my bread.<sup>4)</sup>

姿の见えないジャックに対して、危険なものの気配を察した巨人が、大声で叫んでいる。

オーピー夫妻やH.B.Weissによると、更に遡って、1596年にトーマス・ナッシュ (Thomas Nashe) がその著「いざ、サフロン・ウォルデンへ」(*Have with you to Saffron Walden*) の中で、[あの巨人の『フィフォファム、イギリス人の血のにおいがする』と言うことばが最初に生み

出された一日のことを述べるができる資料を見つけ出す人がいれば貴重な金言のような学者である] (a precious apothegmaticall pedant who will finde inough to dilate a whole daye of the first invention of Fy,fa,fum,I smell the bloud of an Englishman!)<sup>5)</sup>と書いている。この「フイ ファ ファム」というきまり文句は、血にうえた巨人についての昔話には共通しているらしいが、古謡になっている巨人の叫び声の由来は、人々の関心を誘うが、未だ不明のままである。

### Ⅲ

巨人が本格的に物語に登場する作品として、「アーサー王の死」(*Morte d'Authur*.1485)がある。この中には、アーサー王が聖マイケル山の巨人と戦い、退治するという物語がある。コンスタンチヌの国に巨人がいて、七年間子ども達を捕えて食べてきたが、ジャックは巨人を打ち負かし、既に巨人の犠牲となっていたハウエル郷の奥方のかたきとばかり、巨人の首を打ち落とし、槍の柄にとり付け、ハウエル郷のところに帰還するというものである。

これはジャックの巨人退治と類似の物語であるが、更に時代を遡って、12世紀に書かれたジェフリー・オブ・モンマス (Geoffrey of Mommoth) の『イギリス列王伝』(*Historia Regum Britomine*,1136)<sup>6)</sup>の中でも、アーサー王が聖マイケル山で、巨人と血なまぐさい戦いをしたことが書かれているということである。この本の作者自身も、同時代の歴史書、あるいは、中世以前のケルトの記録やエピソードやケルト神話等を収集し、この列王記を書いたのではないかと考えられている。

次に、[ジャックの物語の大要と物語中の幾つかのトリックの細部は、北欧神話の中に祖型がある]とされているが、それについて最初に言い始めたのは、ウォルター・スコットとされている。この間の事情についてオーピー夫妻は次のように説明している。

Sir Francis Palgrave's pronouncement (generally attributed to Sir Welter Scott) that, 'Jack, commonly called the Giant Killer,' landed in England, from the very same keels and warships which conveyed Hengist and Horsa, and Ebba the Saxon,' has often been echoed by the nursery historians. Certainly the tenor of Jack's tale and details of more than one of the tricks with which he outwits the giants, have prototypes in Northern mythology.<sup>7)</sup>

ここに言う北欧神話というのは、1140年～1160年頃に書かれたスノリ・ストルルソン (Snorri Sturluson) の『スノリのエッダ』(*Edda Snorra*)<sup>8)</sup>のことであり、ここでは神族のみならず、巨人族の起源とその戦いが語られ、ギリシャ神話と異なる特徴を持っている。例えば、巨人が神に先んじて生まれるのである。『エッダとサガ』<sup>9)</sup>によれば、太古の全く何もない奈落の口の南に火焰をあげるムスペルスヘイムという国があり、奈落の北に寒冷のニヴルヘイムの国がある。それらの両極端の要素がぶつかり合うところに、巨人族の祖ユミルが生まれるのである。ユミルが殺され、その肉体から天地が創られる。ユミルの血と肉と骨、そして頭蓋骨までが無駄なく天地創造の為に使われたのである。まさに、はじめに「殺人ありき」という神話は、北欧の厳しい自然と狩猟民族ゲルマン人の民族性を反映して、その天地創造の様子は、激しく荒々しいものである。神族の中で最高の神はオーディンであるが、その子どもトールは、神々の中で最強であり、彼は常に巨人たちと戦い、神々と人間を巨人から守っていたのである。彼は三種類の宝物を所有していた。一つは、小人の作った鉄の槌のミヨルニルで、投げれば必ず

相手にあたり、ひとりでに戻ってくるというものであり、それは巨人の頭蓋骨を打ち砕いてきたのであった。二つ目は、腰につけると二倍の力を与えらる帯であり、三つ目は、鉄の手袋である。

巨人殺しのジャックの武器もトール神と同じ槌であり、彼は幾度も巨人の脳天に槌を打ちおろしている。「ジャックと巨人たちの物語」が最も影響を受けたと思われるのは、『スリノのエッタ』であるが、その例として次のような物語がある。トール神が巨人スクリミールと旅の道づれになった時、巨人の方が神に気を許さず、自らを守ったという話である。巨人は眠る時に、頭があるべき場所にふくらみを作っておくが、それが後に役に立つのであった。夜トール神が強力な彼の槌で巨人の寝ている頭の辺を打ったからである。

In this old Scandinavian folk-tale entitled "Thor's Journey to the Land of Giants," Thor becomes enraged because he can not open the giant's bag, which contains their provisions, and hurls his hammer at the head of the sleeping giant. This awakens Skrymir, who asks if a leaf has not fallen upon him. A second time Thor uses his hammer, driving it into the giant's brain, upon which the giant again awakens and asks if an acorn has not fallen on his head. A third time, Thor buries his hammer in the giant's cheek, with the result that Skrymir again is aroused from his sleep and asks if some moss has not fallen on him. Later in the tale it appears that in every case the sly Skrymir had substituted a rock for his person and so escaped the blows from Thor's hammer.<sup>10)</sup>

このモチーフは、ジャックの物語の中でも用いられている。ジャックがウェールズの二つの頭を持つ巨人の家に宿泊した時、彼はベッドの中に太い棒切れを一本入れて、自分は暗闇で横たわっている。こうしてジャックは巨人の棍棒での攻撃をうまく避けることができ、翌日、『エッタ』の巨人スクリミールと同様、平然と巨人に対応するのである。(How have you rested? did you not feel something in the Night? No, nothing, quoth Jack, but a Rat, which gave me three or four Slaps with her Tail.)<sup>11)</sup>

『エッタ』では悪がしこい巨人スクリミールが神トールの槌を逃れたのに対し、ジャックの物語では、知恵者ジャックがスクリミールの知恵を用いているのであった。このようなトリックについて、オーピー夫妻はスウェーデンの昔話「羊飼いの少年と巨人」の中でも同様の話しがあることを指摘している。

A similar incident occurs in the Swedish tale of "The Herd-boy and the Giant". When the herd-boy rests for the night in the giant's home he takes the precaution of placing a milk churn in his bed, and himself hides behind the door. The next day the giant is astonished to see him alive and well. "I thought I struck thee dead with my club" is his morning greeting; and the pert lad replies: "I rather believe I felt in the night as if a flea had bitten me".<sup>12)</sup>

羊飼いの少年が巨人の家に泊まるが、用心のためにバター授乳器をベッドに入れておく。翌日巨人が「お前を私の棍棒でうち殺したと思ったのだが」と言うのに対し「いやノミにかまれたかと思った」と答えている。こうして恐怖の対象である巨人を知恵を働かせて騙す行為は、読者を喜ばせると同時に、その英雄行為の報酬として財宝や財産を持つ良家の娘の感謝をも得

ることができるということは、若者の想像力を刺激できることは確かである。このようなモチーフは世界の昔話に流布していると思われる。

### お わ り に

「ジャックと巨人の物語」は、いかにも巨人殺しという残虐な場面が多い。ジャックはその無敵の剣で巨人の頭蓋頭に一撃を加えたり、巨人の首を切りとりアーサー王の宮廷に送り届けている。ジャックのこれらの残忍な行為は、エッダ神話の著しい特徴を反映しているし、動物の屠殺に慣れた北欧の牧畜民族の知恵に由来していると思われる。ジャックの冒険談は、サクソン人と共に英国にやって来たのではないだろうか。

神族と巨人族の関係を特徴とする『エッダ』示すように、善の原理としての神性と、それに対する悪の原理としての巨人族の戦いは、世界各地の昔話の共通したテーマになり得るものである。『エッダ』に見られる世界の終末までの巨人族と神族との死力を尽した壮絶な戦いは、歴史上のゲルマン人のあいつぐ戦闘を反映し、また神々の奮戦の様は、ゲルマン英雄たちのそれを反映している。

神話ではなく庶民の間の妖精物語としては、登場するのは世の悪を代表する巨人や魔法使いや竜であり、知恵を持つ人間、特に、ジャックや親指トムのような子どもや若者である。民間伝承としての巨人の話、特に、人食い巨人の話が親指トムのような話と同様、イギリスの庶民の炉ばたで語られていたと考えられる。この「ジャックと巨人の物語」は、それらの民間伝承としての巨人の話を、イギリスの妖精物語らしくアーサー王の宮廷を背景にして、親指トムや北欧神話からのモチーフやプロットを借用しながら、一つの英雄物語になったと言えよう。

### 注

- 1) Samuel F. Pickering, Jr., *John Lock and Children's Books in Eighteenth Century England* (The University of Tennessee Press, 1985), p.40. この本から18世紀のイギリスにおける子どもの本の出版状況が分かる。
- 2) John Ashton, *Chambers' Books of the Eighteenth Century* (Chatto and Windus, 1882), pp.184-185. (図1.図2はこのページの図を使用した。)
- 3) Iona and Peter Opie, *The Classic Fairy Tales* (Oxford Univ. Press, 1974), p.48. 英文では次のように書かれている。Only the second part seems to exist, or to have existed (for, in keeping with its enchanted subject, the copy in the British Museum has vanished),...
- 4) *Ibid.*, p.63.
- 5) Harry B. Weiss, "The Autochthonal Tale of Jack the Giant Killer", *Scientific Monthly*, vol.28, February 1929, p.128. オーピー夫妻もT.ナッシュの同じ本から同じ引用をしている。48頁。
- 6) Harry B. Weiss. *op. cit.*, p.128.
- 7) Iona and Peter Opie. *op. cit.*, p.47.
- 8) Harry B. Weiss, *op. cit.*, p.129.
- 9) 谷口幸男著、『エッダとサガ』(新潮社,1989)(エッダの物語については、この本を参考にした。)
- 10) Harry B. Weiss, *op. cit.*, pp.129-130.
- 11) Iona and Peter Opie, *op. cit.*, p.55.
- 12) Iona and Peter Opie, *op. cit.*, p.47.